

### 第3回超領域社会工学研究会 ZOOM 研究会報告書

日時：2022年11月12日 オンライン ZOOM 開催

今回も慶応義塾大学慶友メディア研究会との合同での ZOOM 開催です。

講義（慶応義塾大学法学部 大和田俊之氏）

テーマ：「2010年代のアメリカン・ポピュラー・ミュージック—ブラック・ライヴズ・マター運動とアジア勢の活躍」

・2010年代はアメリカにとって大事な時代 → 音楽ビジネスモデルが変わり、かつての LP や CD は影を潜め、ストリーミング・サービスによる音楽配信に置き換わっていった。

・ストリーミング・サービスの普及による音楽産業への影響 → LP や CD は売り上げでヒットの動向を計測していたが、ストリーミング・サービスは再生件数によってヒットの動向を計測するので、数年前にリリースした曲であっても、継続して再生があれば、ヒットチャートの上位にあがる。

・SNS の影響が大きい。

・イントロが短くなり（1980年代：20-25秒、2015年：5秒）、楽曲も短くなった。

・2022年10月、ビルボード・ソング・チャート TOP10 をテイラー・スウィフトが独占した。1966年、ビートルズの TOP10 中8曲の記録を塗り替えた。

・テイラー・スウィフトのアルバムがシングルカットされ、アルバムすべての曲がヒットした。→ チャートのあり方を変えた。

・ストリーミング・サービスが再生されるたびにヒットとしてカウントされ、年間チャートの意味が変わってきた。→ 売り上げではなくヒットで計測する。

・一方、1980年-2020年のアメリカ国内の人種の割合が変化してマイノリティー（ヒスパニック系）が増えている。アジア系も台頭し、可視化されはじめた。  
→ アメリカの政治経済が変化してくる。

・黒人はアメリカ総人口の12%程度、都市部・南部に集中している。

・Black Lives Matter：白人警官による黒人の殺害に対して、アフリカ系アメリカ人による抗議運動 → スマホで白人の行為を映像記録、拡散 → 白人警官の暴力が可視化

・Black Lives Matter の主な争点2つ：①Police brutality(警官による残虐行為)、  
②Systemic racism(構造的差別)

・Police brutality(警官による残虐行為)：2020年ジョージ・フロイド事件（白人警官によって殺害される） → 事件の2週間後、Lil Baby “The Bigger Picture” が全米ビルボード総合チャート第3位 → 政治的な問題を突いた楽曲がヒットした。

・2017年黒人音楽がロックを抜き、一番大きなジャンルとなった。→ 2020年

アメリカ音楽業界に進展があった。→ 役員のトップにアフリカ系アメリカ人が就き、1960年代のキング牧師の公民権運動や1970年代スティーヴィー・ワンダーによるメッセージソングと比較して、政治的な黒人音楽が大きなヒットにつながるようになった。

・その一方で、Systemic racism(構造的差別)：2020年グラミー賞ポップス部門で受賞したLil Nas X & Billy Ray Cyrus “Old Town Road”は、グラミー賞の受賞は素直にうれしいが、その反面、カントリーチャート(白人主流の部門)の第3位まで上がっているながら、カントリーチャートから外されたことに不満を表明した。→ 黒人は黒人音楽のジャンルでしか勝負できない、評価されない、そもそもシステムができていない。→ 音楽業界と人種差別問題は無縁ではない。

・Black Lives Matterに対する批判：黒人コミュニティに対する批判的重層的まなざしがある。→ 黒人コミュニティ内における差別 → 肌の色の濃い者に対する色の薄い者による差別がある。例、黒人コミュニティの中でも、肌の色の薄い女性と結婚したがる。

(質疑応答)

Q. ヒップホップはサブカルチャーかメインストリームか。

A. ヒップホップは一番大きなストリーム。先進国の中で日本はヒップホップが入ってこなかった。日本では、2000年RIP SLYMEがメジャーデビューした

のが初めて。

Q. アメリカの楽曲は、歌詞（言葉）を重視するのかビート（サウンド）が中心なのか。

A. コンサート会場ではみんなラップしている。歌詞が頭に入っていて、詩を聴いている。サウンドは流行があり、時代性が現れる。

・アジア系の台頭：K-POP の BTS のアメリカ市場での成功、2020 年 9 月ビルボードシングルチャート第 1 位を獲得。→ アフリカ系アメリカ人と韓国系の連帯が影響を与えており、背景に、1992 年ロス暴動がある。

・1960 年代～70 年代に韓国人がアメリカに移住しコリアタウンを形成するようになった。

・1992 年ロス暴動：アフリカ系アメリカ人を殺害した白人警官が無罪になったことに反発して抗議行動が起こったことに端を発し、抗議行動がエスカレートして、コリアタウンの商店街を襲撃する事態に発展した。

・ロス暴動をきっかけに 1990 年代コリアタウンの韓国人が帰国（逆移民）するようになり、ヒップホップのサウンドを母国に持ち込み、K-POP 第一世代を形成した。→ 今は、K-POP は、アメリカのヒットチャートを参考にしている。

・アジア系とアフリカ系の連帯：コロナ禍は中国発のウイルスによると発言した当時のトランプ大統領の影響により、アメリカのアジア系アメリカ人が暴力の

対象となった。→ 反アジアヘイトクライムと BLM が重なり、両者の連帯が叫ばれるようになった。

・アフロアジア (マイノリティ同士の研究) → アジア系アメリカ人に対するステレオタイプ (アフリカ系アメリカ人に対するものとは全く違う) → 黄禍論 (Yellow Peril)、永遠の外国人 (アメリカ人としてみてもらえない)、モデル・マイノリティ (アフリカ系アメリカ人との対比、例、タイガーマザー (過剰に抑圧する教育ママ)、集団的同期的ダンス (カルグンム)、両性具有「第三の性」

・2010 年代、集団的同期的ダンス大会にアジア系クルーの優勝が続いた。→ K-POP が流行り、アメリカ進出した。

・2010 年代、両性具有「第三の性」：化粧する男子、マッチョマンとの対比、男らしさが批判の対象となる。強引さはかっこよくない。→ K-POP の男子に目が行った。また、#Me Too 運動とも共鳴した。

Q. ストリーミングが主流となり、ミュージシャンの収入は多いのか。

A. 具体的な数値は不明だが、2014 年ごろに、音楽業界は食えない産業と批判があったが、ストリーミング取扱社が多数あり、そのすべての再生件数から収入が入ってくる。ミュージシャン側からの文句は出なくなった。

Q. 男性の中性化という話があったが、本質は男性中心で、世代・地域 (例えばシカゴ) によって違うのではないか。

A. シカゴは黒人が多く、白人と対立している。アジア系は少ない。BLMにシンパシーを感じるのは、親世代・アフリカ系アメリカ人、アジア系でコミットしているのは若い女性（K-POP ガールズ、女性ファン）が多い。白人のマッチョな男性は評判が悪い。BTS のファンに白人もなっており、ビルボードの総合チャート第1位というのは重みがある。

Q. 日本でヒップホップがメジャーになったことはないと思う。アメリカの中間層が没落し低所得層が増加したことを背景に、ヒップホップが詩をラップするのであれば、ヒップホップ文化は、個人的なフラストレーションのはけ口か。

A. アフリカ系アメリカ人のコミュニティにおいて 1970 年代、80 年代にポスト工業化社会のあおりで、安い人件費を求めて工場閉鎖により失業という流れがあった。ヒップホップはそのような失業者の声を拾った。→ 1980 年代、日本に入ってきて、サブカルチャーとして最初の文化コンサートを開いたのが「いとうせいこう」。90 年代は、「キングギドラ」が日本語ラップで一世を風靡した。→ 2000 年代以降、日本語ヒップホップは不況。ネットの普及で地方に拡散した。日本ではアンダーグラウンドで活躍することが多く、ヒットチャートには上がってこない。地方のヤンキーカルチャーと同化し日本の経済格差の中で若者がラップしている。

Q. ヒップホップの歌詞は反社会的・自己主張が強いと思うが、今後のアメリ

カは統一されるのか、分断が進むのか。

A. 分断は進んでいる。自己主張が強いということだが、ラップは俳句の句会にたとえられる。お題をあたえられ、それに対して、気の利いた韻を踏みながら、ビート・ラップする。白人社会を批判するラップがポピュラーなテーマである。かっこよく韻をふみつつ、オチがつく言い回しは、日本のお笑い文化に近い。ゲームの中で韻を踏むゲームもあり、ジャズのソロの掛け合いと同じように交歓している。

(文責：須賀淳子)

(研究部会長 増子保志)